

Title	アウグスティヌスにおける自己知
Sub Title	The self-knowledge in St.Augustine
Author	佐藤, 真基子(Sato, Makiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2007
Jtitle	哲學 No.118 (2007. 3) ,p.29- 50
JaLC DOI	
Abstract	In the 10th book of the Confessiones, Augustine confesses what he knows of himself and what he does not know of himself. When he confesses what he does not know of himself (28, 39^-), Augustine closely examines which temptations he has resisted and which he doesn't. In the course of his examination, he declares that he has become a quaestio to himself and it is his languor (33, 50). In this paper, I have investigated the meaning of two passages closely related: "mihi quaestio factus sum". and "ipse est languor meus." Through his soul-searching, Augustine clarifies the miserable condition of our human beings. At the same time, however, he discovers the self, which is not yet clearly known to him, but is undoubtedly a part of himself. This discovery of self also implies his consciousness of original sin, which obscures himself from himself. This is why he says he has become a quaestio to himself, and this quaestio is a state of languor. Thus, for Augustine, human 'self' is in a miserable condition, but the consciousness of it opens to the possibility of becoming better.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000118-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000118-0029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

# アウグスティヌスにおける自己知

— 佐 藤 真 基 子\* —

## The Self-Knowledge in St. Augustine

*Makiko Sato*

In the 10th book of the *Confessiones*, Augustine confesses what he knows of himself and what he does not know of himself. When he confesses what he does not know of himself (28, 39~), Augustine closely examines which temptations he has resisted and which he doesn't. In the course of his examination, he declares that he has become a *quaestio* to himself and it is his *languor* (33, 50).

In this paper, I have investigated the meaning of two passages closely related: "mihi quaestio factus sum" and "ipse est languor meus." Through his soul-searching, Augustine clarifies the miserable condition of our human beings. At the same time, however, he discovers the self, which is not yet clearly known to him, but is undoubtedly a part of himself. This discovery of self also implies his consciousness of original sin, which obscures himself from himself. This is why he says he has become a *quaestio* to himself, and this *quaestio* is a state of *languor*. Thus, for Augustine, human 'self' is in a miserable condition, but the consciousness of it opens to the possibility of becoming better.

\* 慶應義塾大学文学部非常勤講師

アウグスティヌスは『告白』第十卷 33 章 50 節で次のように言う。

flete mecum et pro me flete qui aliquid boni uobiscum intus agitis, unde facta procedunt. nam qui non agitis, non uos haec mouent. tu autem, domine deus meus, exaudi, respice et uide et miserere et sana me, in cuius oculis mihi quaestio factus sum, et ipse est languor meus.

33 章においてアウグスティヌスは、歌など聴覚をみたま快乐に対して自分がどのようなあり方をしているかを告白している。その告白の最後において、上述のように、「よいことを心の中で実行し、そこから行為が表れ出る」人々に向かっては、自分とともに自分のために泣いて欲しいと願い、神に向かっては、自分のことを「聞き届け、顧み、見て、憐れみ、癒して欲しい」と願う。そしてその神の目において、自分は自分にとって「quaestio」となり、それはまさに自分の「languor」と説明している。自分が自分にとって「quaestio」となり、それが自分の「languor」とであるとはいかなることか。以下において、この言明を分析することによって、アウグスティヌスにおける自己知の考え方を考察する。

## I

上記引用における quaestio を、「問い (question, quaestio, Frage, questione 等)」と訳している訳は少ない。調べ得た限りでは、唯一 Sheed<sup>1</sup> が、「I have become a quaestio to myself」と訳している。最も多い訳は、quaestio を、「問題 (problem, problème, problema)」とする訳である<sup>2</sup>。question も problem も、日本語ではいずれも「問題」と

<sup>1</sup> 以下、当該箇所の訳を参照した文献については、本稿末に表記した。

<sup>2</sup> BA, Bourke, Chadwick, Luis, Masini, Pusey, Trabucco, Watts.

訳すことができ、諸語においてもその違いは必ずしも明確でないが、しかしより原語に忠実である question の訳を採用せずに、problem とすることには、理由があると思われる。

Glare によれば<sup>3</sup>、quaestio の第一義は the act of searching すなわち探求することであり、そこから、論題 (the subject of discussion or dispute) すなわち答えを求めて探求される問いを意味する。探求されるものであるということは、それを探求する主体はまだその答えを知っていないということである。したがって、「私が quaestio となる」ということは、自分が探求されるものとなるということであり、自分がまだ知られていないものとなるということであると考えられる。question と problem はいずれも探求されるものを意味するから、「mihi quaestio factus sum」をどちらの言葉で訳す場合も、自分が自分にまだ知られないものとなったという事態を示しているといえる。しかし「彼は問いである」、「彼は質問である」という表現が一見奇妙であるように、question が人間について表現されることは稀である。ある人間のことが分からないという場合、「he is a question」という言い方を用いなくても他の表現によって表すことができる。それに対して problem は、その対象が分からないものであるということから、厄介である、悩みの種であることを意味し、「he is a problem」のようにしばしば人間について表現される。「私が quaestio となった」というアウグスティヌスの言明について、question ではなく problem という訳が多く採用される背景には、このような考えがあると推測できる。<sup>4</sup>

<sup>3</sup> P. G. W. Glare, *Oxford Latin Dictionary*, Oxford, 1996.

<sup>4</sup> 日本語においても、「問い」ではなく「問題」という言葉において、それが厄介なものであるという意味が示されるため、本稿では question を「問い」、problem を「問題」と訳し分けた。しかし例えば内村は「問題」と訳しているが、question と trouble の違いのような区別を見出しているかは不明である。

「puzzle となった」という訳も<sup>5</sup>、problem と同様に、自分のことが分からなくなり厄介なものになったという事態を説明する訳である。problem よりいっそう、自分のことが分からなくなることによって当惑している事態が示されると思われる。訳の適否は後に検討するが、ここでわれわれが留意すべきは、problem, puzzle の訳においては、「quaetio となった」ことを厄介に思う、困る、当惑する「思い」が読み込まれていることである。そのような「思い」が読み込まれることにおいては、「quaestio」が持つ、探求される問いという意味は重要視されていない。そのような「思い」を読み込むことが正しい解釈であるか検討しなければならない。

problem とならんで多く採用されている訳は、「謎 (enigma, enigme, Rätsel)」である<sup>6</sup>。この訳においても、自分のことが分からなくなったという事態が説明されている。しかし quaestio の訳として他の語でなく敢えて「謎」という言葉が選ばれることは、一見奇妙である。この訳を採用する背景には、「私たちは今は鏡を通して謎において見えています videmus nunc per speculum in enigmatē」(I Cor. 13, 12) という聖書の言葉が念頭にあると思われる。訳者の念頭にあるというよりもむしろ、アウグスティヌスが「私が quaestio となった」と語るとき、この聖書の言葉ないし考え方が彼の念頭にあると解釈されて、「謎」という訳が選ばれているといえよう。じっさいアウグスティヌスは、同じ第十卷の5章においてこの聖書の言葉を引用して、この世において人間はまだ謎において神を見ているのであって、「顔と顔を見合わせる」仕方で見えていないことを述べている。完全な仕方では知っているのではない、この世における知り方が、「謎において」知っている知り方である。かくして、「自分が謎となった」という訳においては、神を知ることができないことと同様の仕方、自分

<sup>5</sup> Pilkington.

<sup>6</sup> Cambronne, Labriolle, Thimme, Vega, 今泉, 服部, 山田.

を知ることができないという解釈がなされていると推測される。しかし、この聖書の箇所では謎において見られているのは神であるのに対して、33章で「quaestio となった」のは自分であって神ではない。われわれは、この第十巻の議論において、神を知る知り方と自分を知る知り方がいかなる仕方に関係づけられているかを検討した上で、「私が謎となった」という訳の適否を判断しなければならない。

以上のように、「mihi quaestio factus sum」というアウグスティヌスの言明について、自分が自分に知られないものとなったという事態が説明されているという点で諸解釈は一致しているが、それが「私にとって mihi」すなわちアウグスティヌスにとって、いかなる事態であるとみなされているかについて解釈が分かれている。じっさい、「mihi quaestio factus sum」を説明して続けて言われている、「それこそは私の languor です」という言明における「languor」も、「弱さ」<sup>7</sup>、「病」<sup>8</sup>、「悪」<sup>9</sup>など訳は分かれている。

## II

はじめに、直前の文脈から「mihi quaestio factus sum」という言明について検討してみよう。本稿の冒頭で述べたように、この言明が言われる第十巻 33 章は、歌など聴覚をみたす快樂に対して、自分がどのようなあり方をしているかを論じる議論にあてられている。アウグスティヌスに

<sup>7</sup> Bourke, Cambronne, Labriolle, Masini, Pilkington, Pusey, Sheed, Thimme, Vega, Watts, 今泉。

<sup>8</sup> Chadwick, Moreau, 内村, 山田。

<sup>9</sup> BA, Du Bois, Luis, Trabucco。

よれば、神がそれを抑えるように人間に命じる「肉の欲」<sup>10</sup> の一つが、聴覚をみたす快楽への欲である。この神の命令にしたがうならば、歌は感覚を楽しませるものであるから、それを求める欲は抑えられなければならない。とはいえ、アウグスティヌスは歌を聴くことを全面的に禁じない。それは、讃美歌が信仰の助けとなる場合があるからである。じっさい彼自身、洗礼を受けたアンブロシウスの教会で、讃美歌が歌われるのを聴いて涙する経験をしている<sup>11</sup>。では讃美歌はどのような仕方で聴かれるべきであるのか。それについてアウグスティヌスは、次のように説明する。

歌われている事柄よりも、歌が私を動かすようなことが私に起こる場合には、私は罰せられるべき仕方で罪を犯していると告白します。その場合には、私は歌が歌われるのを聴こうとするべきではありません。ご覧の通り、私はこのような状態にあります。(Conf. 10, 33, 50)

この言明において、歌われている事柄と、歌すなわちその旋律や響きは、次のように考えられることによって区別されていると思われる。すなわち、旋律や響きは感覚を楽しませる快楽であって、それを求めることはこの世のものを目的として愛することになる。それに対して、讃美歌で歌われている事柄は、聖書で言われている事柄すなわち神の言葉の内容である。したがって、それを求めることは神を愛することになるといえる。アウグスティヌスは、神のみが、それを目的として求められるべきものであ

<sup>10</sup> Conf. 10, 30, 41「あなたはたしかに、肉の欲、目の欲、世間的野心を抑えるようにと命じます。 iubes certe, ut contineam a concupiscentia carnis et concupiscentia oculorum et ambitione saeculi」この発言は、I Ioh. 2, 16の言葉が念頭におかれていると考えられる。アウグスティヌスは、「肉の欲」を性、飲食、嗅、聴、視覚の欲、「目の欲」を好奇心、「世間的野心」を、人々から畏敬され、愛されたいという誘惑と解釈している。

<sup>11</sup> Conf. 9, 6, 14.

り、神以外のものは、それを目的として求められてはならないと考えているのである<sup>12</sup>。このように、讃美歌を聴くことにおいて何が求められ何が求められるべきでないかということを、たしかにアウグスティヌスは「知っている」。しかし彼は、自分は歌の響きに心が動かされることはもはやないと断言するのではない。上記引用の「歌が私を動かすようなことが私に起こる場合には」という表現に明らかであるように、動かされるべきでないを知っていながら、不本意にも動かされるという可能性が考えられているのである。聴覚に関する欲を検討する前に、アウグスティヌスはその他の欲についても論じているが、いずれの欲についても、今自分がそれらに対してよいあり方をしているからといって安心することはできないとみなしている<sup>13</sup>。今歌の響きに心を動かされているというのではなく、不本意にも心を動かされる可能性をもっているというあり方を指して、「私はこのような状態にあります」と言われていることが分かる。そして、このように自らの状態が示された後、続けて言われていることが、本稿冒頭に示した箇所である。次のように言われている。

何かよいことを心の中で実行し、そこから諸々の行為が表れ出る方々は、私と共に、私のために泣いてください。というのも、こうした事柄が、それを心の中で実行していないあなた方を動かすことはないからです。

アウグスティヌスのあり方と対比して説明されているのが、「よいこと

<sup>12</sup> cf. *Conf.* 10, 29, 40 「あなたを目的として愛しているのではない別のものを、あなたといっしょにして愛する人は、より少ない仕方であなただけを愛しているのです。」

<sup>13</sup> *Conf.* 10, 30, 41～32, 48 「その全てが *temptatio* (誘惑、試練) と言われているこの世においては、悪いあり方からより善いあり方になり得た者が、善いあり方からより悪いあり方になることはないかどうか、誰も安心してはなりません。」 (32, 48)



を心の中で実行し、そこから行為が表れ出る」人々である。彼らにおいては、心の中で考えられていることと行為が一致しており、ずれることがないという。上で示したように、アウグスティヌスも何がよいことであるかは分かっている。したがって、それを実行しようと思えることはできる。しかし、実際の行為がそれに一致するとは限らない。アウグスティヌスがこのように自らのあり方を説明するとき、念頭におかれているのは、次のパウロの言葉であると思われる。

私は律法が霊的なものであることを知っています。ですが私はといえば肉的で、罪の下に売られています。私は自分のしていることが分かりません。というのも、私は望んでいることを実行せずに、憎んでいることをするからです。(Rom. 7, 14-15)

望んでいるよいことは実行せず、望んでいないよくないことをしてしまう人間のあり方が、肉と霊の考え方によって説明されている。アウグスティヌスは第十巻のこの箇所では、肉と霊の概念で説明していないが、自己の内に、行為と意志の不一致をみとめる考え方はたしかにパウロにしたがっている。意志しているのは自分であるが、意志していないことをするのも自分であるとみなしているのである。

かくしてアウグスティヌスは、行為と意志が一致しないあり方について、常にそれらが一致する人々に対して、ともに泣いてくれるようにと願っている。そして続く言明においては神に対して、そうした自らのあり方を憐れみ癒してくれるように願っている。行為と意志が一致しないあり方を「癒す sanare」、すなわち一致するものにさせるのは神であると考えられているのである。そしてその神の目において、「私は私にとって quaestio となった。」と述べられている。「quaestio となった」自己と「私にとって」という仕方で示される自己が区別されているが、quaestio

となった「私」とは、いかなる自己であるのか。それは、意志している「私」でもなければ、意志しないことを行為する「私」でもないと思われる。というのも、例えば歌の旋律に感動するとき、たとえ人の目に触れないとしても、本人がそれを自覚するということがある。本人でさえ気づかないという場合も考えられるが、いずれにしてもその「行為」は、自分に意識されうる仕方で表れ出ているものである。したがって、意志する「私」はもちろんのこと、意志しないことを行為する「私」も、自分に意識されうる「私」であるといえる。たとえ意志しないことを行為するとしても、そのようなあり方をしている「私」として意識され、知られるのであるから、それ自体は quaestio ではないといえよう。quaestio となった「私」がいかなる自己のことであるか、さらに議論をすすめよう。

### III

より広い文脈から、「quaestio となった私」について検討してみたい。全13巻からなる『告白』においてアウグスティヌスは、第一巻から第九巻まで、自らの過去について「告白」している。そして第十巻では、現在の自己について告白している。現在の自己について告白するとき、アウグスティヌスは、「私について私が何を知っているか」と「私について私が何を知らないか」を告白すると言う。知っていることといっても、それは無数にあると思われる。現在の自分がいかなる環境にあるかを語ることもできるであろうし、能力や習慣を挙げていくこともできよう。自分について知らないことについても同様である。しかしアウグスティヌスは、そうしたことを告白するのではない。自分について知っていることと知らないことを告白すると宣言した上ではじめに告白されていることは、「私は、疑わしい意識においてではなく確かな意識において、主よ、あなたを愛している」ということである。自分が神を愛しているということが、自分について知っていることとして語られているのである。そしてそれを語った

後、記憶の中に神を探求する議論が展開されている。この議論は O'Donnell が指摘しているように<sup>14</sup>、第九巻のオスティアにおける神体験の記述と対応している。すなわちすでに体験したこと、知っていることの告白である。そして神を探求する議論の最後に、「私を越えて、あなたにおいて」神を見出したという「知っていること」が語られた後<sup>15</sup>、自分について知らないことが語られ始める。アウグスティヌスは次のように言う。

嘆かれるべき喜びが、喜ばれるべき悲しみと張り合っています。どちらから凱歌があがるか私は知りません。悪しき悲しみが善き喜びと張り合っています。どちらから凱歌があがるか私は知りません。(Conf. 10, 28, 39)

自らの内に争いがあると言われている。それは単なる喜びと悲しみの争いではなく、喜びにみえて実は嘆かれるべきものと、悲しみにみえて実は喜ばれるべきものの争いである。ではアウグスティヌスは、何を喜び、悲しむべきか見当がつかないと考えているのであろうか。そうではないと思われる。というのも、第十巻冒頭ですでに、神が自分を知っているような仕方で自分も神を知ることを希望して喜ぶならば、それが健やかな仕方で喜ぶことであると述べられている。そしてこの世の生の他のものは、嘆かれなければいっそう嘆かわしく、嘆くならば嘆かわしくはないと述べられている。神を知ることができるという希望をもって喜ぶならば、喜ぶべきものを喜んでいるのであり、そうした希望を持たずにこの世のものを喜ぶならば、嘆かわしいことであると考えられているのである。かくしてアウ

<sup>14</sup> *Augustine/Confessions*, v.3, commentary by J. J. O'Donnell, Oxford, 1992, pp. 150-154.

<sup>15</sup> *Conf.* 10, 26, 37.

グスティヌスは、何を喜び、悲しむべきか、はっきりと認識しているといえよう。

ではこの自らの内面における争いは、いかなる争いであるのか。すでに5章において、「私は、自分がいかなる誘惑に抗うことができ、いかなる誘惑に抗うことができないか知りません」と述べられていることに注目しよう。ここで言われている「誘惑」とは、「地上の人間の生は誘惑に他ならない」<sup>16</sup>と述べられていることから分かるように、神を目的として求めることの妨げとなる、この世の諸々の誘惑のことである。そうした誘惑に、たとえ今は諸々の誘惑に抗うことができているとしても、今後いかなる誘惑にも抗うことができるとは限らない。アウグスティヌスは、常に誘惑に陥る可能性を有するものとして、自らを捉えているのである。そしてその誘惑について、諸感覚の欲やその他の欲に分類して詳細に論じられるのが、自分について知らないことを告白する28章39節からの議論なのである。かくして、自らの内面における争いとは、誘惑に抗おうとしているアウグスティヌスの内面の状態であると考えることができる。そして、いかなる誘惑に抗い、抗い得ないかを知らない、喜びと悲しみのどちらが勝つか知らないと述べるアウグスティヌスの言葉には、神を見出す経験を経ても尚、ふたたび、神を目的として求めずに、神以外のものへと転落してしまうのではないかという不安が表明されているとみなすことができよう。

以上のように、常に誘惑に陥る可能性を有するものとして「私」が捉えられている。そしてそうした「私」は、自分について知らないこと、すなわち未知の私のあり方について告白する中で示されている。アウグスティヌスは、意志する「私」でなく、意志に反することを行為する「私」でもなく、意志に反することをする可能性を有する「私」というものをみとめ、それは未知の「私」であると考えているのである。歌の誘惑につい

<sup>16</sup> Conf. 10, 28, 39 “numquid non temptatio est uita humana super terram.”

て、それに心が動かされることはもはやないと断言することはできないと考えられていることは、本稿Ⅱ章で示されたとおりである。意志しなくとも行為してしまう可能性があるという、自らのあり方を通して、アウグスティヌスは、意識上にはないながらもたしかにある「私」というものを見出しているのである。quaestio となった「私」とはこのような自己のことであるといえよう。

#### IV

かくしてアウグスティヌスは、諸々の誘惑に対して自らがいかなるあり方をしているかを吟味することによって、自らの意志によって直接動かすことができない、意識下の領域を自らの内に見出した。それはまだ知られていない「私」であって、そのような「私」があることに気づくことは、自分が自分に知られていないものとして認識されるということである。そうした事態が、「私が私にとって quaestio となった」という言明で示されていると考えられるが、なぜそうした「私」は、単に「知られていないもの」と言われるのではなく、「quaestio」と表現されているのか。『告白』第四巻にみられる同様の表現をみてみよう。

私自身が私にとって大きな問いとなりました。私は私の魂に、なぜ悲しいのか、なぜ私をひどくかき乱すのか、と尋ねていました。しかし私の魂は私に何も答えることができませんでした。(Conf. 4, 4, 9)

factus eram ipse mihi magna quaestio et interrogabam animam meam, quare tristis esset et quare conturbaret me valde, et nihil nouerat respondere mihi.

これは、青年時代に親しい友人の死に際し、悲しみにくれたときについての記述である。あまりにも辛く苦しい悲しみであることから、アウグス

ティヌスはその理由を探求している。たしかに友人の死がその理由であるが、悲しみの感情それ自体は、自分から生じるものである。したがって、その感情を生み出す自らの魂に、アウグスティヌスは問うているのである。そしてその問いに対して魂は何も答えなかったとされているが、ここで注目すべきは、問い、答えるという、往復する関係が quaestio とともに述べられている点である。quaestio が、単に分からない事柄というのではなく、答えを求めて質問されるものとして提示されているのである。しかし、「魂」とはいえ自分であることに相違ない。自分に質問するとはいかなることであろうか。

アウグスティヌスは、ここで悲しみの理由を問うているが、例えば具体的に悲しみのメカニズムを説明して欲しいと言っているのではないであろう。むしろ、悲しむな、こんなにひどく自分を苦しめるな、と願っているといえよう。じっさいこの「なぜ悲しいのか、なぜ私をひどくかき乱すのか」という言葉は、『詩篇』における同様の表現<sup>17</sup>が念頭におかれて言われているが、『詩篇』の箇所では、「神に希望しなさい」という命令文が続いている。そしてアウグスティヌスも、続く言明でその命令の言葉を引用している。こうしたことから、自分に問うとは、あるべきあり方を願い、命じることとして考えられていることは明らかであると思われる。魂は何も答えなかったと述べられているが、魂は、願われ、命じられたところでそれにしたがうのではない。かくして、そのような「私」は、まだ解決されない問いすなわち quaestio となったと説明されているといえよう。

第十巻における「quaestio」についても、同様に考えることができる。まだ意識の上にあるのではない、未知の「私」は、誘惑に陥る可能性を有しているものとしての「私」であるから、すでに意識されている「私」は、未知の「私」が誘惑に陥らないようにと願い、命じるという仕方で「問う」。しかし、まだ知られず、意識されていない「私」は、そうした意

<sup>17</sup> Ps. 41, 6, 12; 42, 5.

志の力によって直接動かすことはできないものであるから、問うても答えは得られず、まだ解決されない問いとしてある。quaestio という表現が用いられていることの背景には、このような考察があるといえる。

## V

では、自分にとって quaestio であると表現された、意識されているのではない「私」について、そうした「私」のあり方が「languor」であると言われているのはなぜであろうか。languor は、「弱くなること」を意味する動詞 *languescere* の名詞で、一般に、弱さあるいは病と訳される。languor という言葉は、『告白』第十巻の中で繰り返し使われており、その多くは、神が私の諸々の languor を癒すという表現においてみられ、複数の形で表れている<sup>18</sup>。この表現は『詩篇』102,3「(主は) あなたのすべての弱さを癒す *qui sanat omnes infirmitates tuas*」が念頭におかれていると考えられることから、それが人間のもつ何らかの弱さを意味し、複数あるものとして捉えられていることは確かであると思われる。

しかし、われわれが検討している「*mihi quaestio factus sum*」について言われているときは、単数で表されている。では、自分が quaestio となったという事態の他にも languor があると考えられているのであろうか。そうではないと思われる。というのもこの第十巻において、他の事態について、これが languor であると説明されている箇所はないからである。むしろ次のように考えられるであろう。すでに示したように、アウグスティヌスは聴覚をみたす欲について論じる中で、自分が quaestio になったと述べているが、他の欲について自分がいかなるあり方をしているかを吟味する中でも、同様の事態すなわち意識される「私」ではない「私」に気づくということがなされているといえる。性欲について検討す

<sup>18</sup> *Conf.* 10, 30, 42 “numquid non potens est manus tua, deus omnipotens, sanare omnes languores animae meae...” 他 3, 3; 41, 66; 43, 69 など。

れば、夢の中では欲が抑えられていない自分に気づき、嗅覚の欲について検討すれば、今はよい状態にあっても今後常に抑えられるとは断言できない自分に気づく。あらゆる誘惑について検討する中で、その都度、まだ知られていない問いとしての「私」が見出されるのである。

そして、このようにして見出される「私」は、常に誘惑に陥る可能性をもつもの、諸々の罪を犯す可能性をもつものとしての「私」である。アウグスティヌスは『詩篇講解』118, s.3において、人間に内在する罪について論じており、その中で、「私たちが望んでいないのに罪が犯されるのは、ただ不当な欲望によってに他なりません。quid enim peccatum nolentibus nobis, nisi sola illicita desideria」と述べている。そして、その「不当な欲望」について、「それは別の本性の力なのではなくて、私たちの本性の languor なのです。non est naturae vigor alienae, sed languor est nostrae」と説明している<sup>19</sup>。この説明は、ロマ書7章における、「もし私が望まないことをするならば、それは私がするのではなく、私の内にある罪がするのです」<sup>20</sup> というパウロの言葉を解釈してなされたものである。我々に内在する罪というパウロの考えを、アウグスティヌスは、我々に内在する、罪を犯そうという欲望と解釈しているのである。今罪を犯していないからといって、われわれは罪から免れているのではなく、罪を犯す欲を常にもつものとして考えられている。そしてそうした人間のあり方が、「languor」と呼ばれているのである。

したがって languor という状態は、実際に罪を犯そうと犯さざるとに拘わらず人間がもっているあり方であって、原罪に由来するあり方のことが言われていると解釈できる。では原罪に由来する人間のあり方は、もは

<sup>19</sup> アウグスティヌスによれば、悪をなすのは別の本性の力によるとはマニ教徒らの主張である。

<sup>20</sup> I Cor. 7, 20 本稿II章においても指摘したように、「意志しないことをする」という人間の行為についてアウグスティヌスが論じるとき、このロマ書7章の議論が土台として考察されていることは明らかである。



や自らの意志の力では動かすことができないものとして諦めるべきであるのか。アウグスティヌスはそのように開き直っているのではない。諸々の誘惑に対する自らのあり方を一つ一つ検討していく中で、彼はその都度、まだ知られていない自己、罪を犯す可能性を有するものとしての自己を見出している。それは、原罪を確認する作業であり、意志の力だけでは無理であることから、神の助力を請い求める契機ともなる作業であろう。しかしその作業は、嘆かわしい人間のあり方を知るといふばかりではないと思われる。というのも、今は知られていない意識下の「私」も、常に変化することなく意識されないのではない。今日の「私」にとって明日の「私」はまだ知られていない「私」であるが、明日にはその「私」は意識される「私」となるであろう。罪を犯す可能性を有しているということは、誘惑に直面する中で、罪を犯さない「私」を日々実現するということも可能であるということである<sup>21</sup>。アウグスティヌスが、「自分について知っていることと知らないことを告白する」意図も、ここにあると考えられる。まだ知られていない自分を見出すことによって、すでに意識されている今の「私」の輪郭を明確にし、よりよいあり方を目指して変化させていく可能性を自らの内に見出しているのではないであろうか。

## VI

ところで、33章50節におけるこの「*in cuius oculis mihi quaestio factus sum, et ipse est languor meus*」というアウグスティヌスの言明を、古い訳ではあるが Du Bois は次のように訳している。

<sup>21</sup> もちろんそれは意志の力によってのみ可能であると考えられているのではない。というのも、今よりもよりよい自分はまだ知られていない自分であって、知られていないあり方を目指すことはできないからである。しかも、自らの行為が罪を免れた善い行為であるか否かは、人間によって判断しうるとは限らない。かくして、どのようなあり方を目指すことがよりよく変化することであるか、その手本となるのがイエス・キリストであると考えられていると思われる。cf. *Conf.* 10, 42, 67-43, 69.

Et vous, mon Seigneur, et mon Dieu, à qui j'expose mes maux,  
et qui êtes la lumière à la faveur de laquelle je tâche de  
découvrir ce que je suis, ...

アウグスティヌスの言明の中に、直接「la lumière」に相当する語はない。しかしおそらくこのように訳されているのは、「in cuius oculis（あなた、すなわち私の主であり神である方）の目において」という表現によっていかなることが示されているかが解釈されているためであると思われる。

「in conspectu」も「in oculis」と同様に「目の前で」と訳される表現であるが、アウグスティヌスの用法において「in oculis」は神についてよりもむしろ人間について言われることが多いことから明らかであるように、対象を視覚によって見るということに焦点が当てられている言い方であるといえよう。『告白』第九巻において、自分ではなく自分とは別の、闇の種族に属する本性が罪を犯すのであると言う人々（マニ教徒）を批判して、アウグスティヌスは、「彼らの目においては、彼らはあなた（神）からはなれて外側にむかっているが、心を私のほうに向けてくれたら」と述べている<sup>22</sup>。そして、彼らは目を逸らしているが、目を向けるべき主ないし神について、「（イエス・キリストは）すべての人間を照らす光」であるという聖書の言葉を示したうえで、それを「内なる永遠の光」と表現している。内なる光であるということは、肉眼によって見ることができる光ではない。いわば心の目によって見ることができる光であると思われる。肉眼が、太陽を見、また太陽によって照らされたものを見ることができるように、心の目も、神である光を見、またその光によって照らされたものを見ることができると考えられる。そうした内なる光によって見ることができるあり方が、肉眼において見るあり方と区別されて、「あなた

<sup>22</sup> Conf. 9, 4, 10.

の目において」と表現されていると解釈することができる。かくして Du Bois は上記のような訳をしていると思われる。

じっさい、ここでの「あなたの目において」ということの解釈は難しい。ラテン語訳聖書においてしばしば見られる「si inveni gratiam in oculis tuis」といった表現のように、「～にとっては」「～の見るところでは」という意味であるとするならば、「私にとって mihi」と言われていることと矛盾するようにみえる。自分が quaestio となったことが、自分に自覚されたことでなく神にのみ知られたことであるとは考えにくい。かくして、Du Bois のような仕方で解釈されうるし、また Moreau のように、神を人間の自己探求の証人と解釈する訳もなされる<sup>23</sup>。いずれにしても明らかであることは、まだ自分に知られない「私」に気づくということが、人間個人の力によって可能であるとはみなされておらず、そこに神がある仕方で関わっていると考えられていることである。自分が自分にとって quaestio となるという事態が、神が何らかの仕方で関わることによって可能であると考えられていることは、その事態がただ嘆かわしいばかりであるとみなされていないことを示している。quaestio となるということ、すなわちまだ自分に知られていない自分があることに気づくということに、積極的な意義が見出されていることは明らかであろう。このことは、まだ知られていない自分に気づくということにおいて、よりよいあり方を目指して自らを変化させていく可能性が見出されているとした、本稿 V 章におけるわれわれの分析を裏付けるものである。

## VII

以上の議論をふまえて、かの言明において「quaestio」および「languor」をどのように訳すべきであるか検討したい。

<sup>23</sup> “Seigneur mon Dieu, témoin de cette laborieuse étude de moi-même...”  
(*Les confessions de Saint Augustin*, trad. par L. Moreau, Paris, 1864).

自分が自分に quaestio となったということは、たしかに、自分に知られない自分があることに気づいたということであるから、知られていない、分からないという限りでは、trouble, puzzle, enigma いずれの訳でも間違いではない。そしてその知られていない自分は罪を犯す可能性から免れない自分であるから、それを見出すことに、厄介である、困惑するという思いがあることを考慮して、それらの訳が選ばれることもある意味では正しい。しかし、そのような自己のあり方は、ただ嘆かわしいばかりではないことは、本稿において示されたとおりである。しかも「quaestio」という表現には、自分を問いただすことによって、よりよいあり方になるよう願うという、いわば自問自答する関係が考えられていた。したがって、一見分かりにくい表現であるとはいえ、quaestio という原語に形の上で近い quaestion（日本語では、「問い」）が訳として採用されるべきであると思われる。

また、enigma という訳においては、この世に生きるわれわれ人間が神を知らないような仕方で自分のことも知らないということが考えられていると推測されるが、自分に知られていない「私」と知られている「私」の関係は、私と神の関係と必ずしも同じではない。たしかに、知られていない「私」は原罪を有している自己であるから、生きているかぎり常に、知られていない「私」はあるのであって、完全な仕方で知るとことは実現しないと考えられているであろう。それは、神をこの世において完全な仕方で知ることはないというアウグスティヌスの考えに一致するものである。しかし、知られていない「私」は日々知られるものとして実現されうることが、すでに示したとおりである。神はそのような仕方で知られるとは考えにくい。したがって、神を知らないという仕方と等しい仕方で「私」を知らないとみなされうる enigma という訳は、適切でないと思われる。

さらに、「languor」は一見したところ、『詩篇』の言葉との関係から、

「弱さ」と訳すことがふさわしいように見える。じっさいアウグスティヌスの他の著作においても、*languor* と *infirmitas* は、区別する仕方で用いられていない例がしばしばみられる。ただし注意しなければならないことは、この「弱さ」は単なる意志の弱さのことではないということである。本稿 V 章で示されたように、*languor* は原罪に由来する人間のあり方であって、自らの意思の力だけによって改善されるものではない。したがって、その *languor* を癒す (*sanare*, 治療する, 健康にする) のは神だけであるという、第十巻でしばしば用いられている言明を考慮しても、病, *sickness* などの訳が、意志の弱さのことであるという誤解をさけるためにも、適切であると考えられる。また、「悪」という訳については、たとえば『説教』151,3 においてアウグスティヌスが、人間がもつ欲について、「それは私たちの *languor* であり、私たちの悪徳です。 *languor noster est, vitium nostrum est*」と語っているように、ふさわしくない訳ではない。しかし「悪」の概念についてはさらに検討が必要であり、た *languor* の概念とどのように関係しているかについては、本稿で明らかにされたことのみでは判断できない。

以上のように、*quaestio* となった自己を見出すという仕方で自己を知することは、単に惨めさを知ることではなく、自らがよりよく変化する可能性をもつことを知ることでもあるとみなされている。惨めさの中からこそ見出される希望であるといえよう。それは、罪を犯す可能性から免れない自己を知ることからのみ見出されるのである。そうした、原罪に由来するあり方を持つ自己を見出すことについて、*trouble*, *enigma* など嘆かわしい「思い」を含めた訳が多く選ばれていることはもっともである。じっさいアウグスティヌスは、自らを知ることが希望を見出すことにつながることを明示的な仕方で語ってはいない。一見したところ、第十巻において、「自分について知らないこと」を語るアウグスティヌスは、ただ嘆い

ているばかりのようにも見える。それは当然である。というのも、第十巻の冒頭で語られていたことは、「嘆かれるほどに、いっそう嘆かれるべきものではない」ということなのである。しかしわれわれは、アウグスティヌスにおける自己知の議論において、そうした矛盾したあり方において人間の可能性が示されていることに注目しなければならない。

### 引用文献

1. *Les Confessions, Oeuvres de Saint Augustin* 14, texte de éd. de M. Skutella, Paris, 1996.
2. *Les Confessions de S. Augustin*, trad. et notes par M. Du Bois, Paris, 1776.
3. *Sancti Aurelii Augustini Enarrationes in Psalmos*, ed. E. Dekkers et I. Fraipont, CCSL, Turnholti, 1956.

### 『告白』訳を参照した文献

BA	引用文献 1
Bourke	V. J. Bourke, Washington, 1953
Cambronne	P. Cambronne, Paris, 1998
Chadwick	H. Chadwick, New York, 1991
Labriolle	P. de Labriolle, Paris, 1969
Luis	P. de Luis, Valladolid, 1994
Masini	A. Masini, Firenze, 1938
Pilkington	J. G. Pilkington, New York, 1876
Pusey	E. B. Pusey, London/New York, 1920
Sheed	F. J. Sheed, New York, 1942
Thimme	W. Thimme, Dusseldorf, 2004
Trabucco	J. Trabucco, Paris, 1982
Vega	A. C. Vega, Madrid, 1974

アウグスティヌスにおける自己知

Watts	W. Watts, London, 1970
今泉	今泉三良, 河出書房, 1955 年
内村	内村達三郎, 春秋社, 1946 年
山田	山田晶, 中央公論社, 1978 年